■　追悼　故白川氏

思い出の中の白川君

小松（19 期）

「白川君」と聞いて心に思い浮かぶこと　それは、柴犬の子どものようなあの笑顔です。今回思い出を語るに当たり数十年ぶりにアルバムを引っ張り出してみました。やはり自分の記憶には間違いなく、どの写真にも人なつっこいあの笑顔が写っていました。

白川君とは、2 年生の時の北海道大雪山系の夏合宿、黒姫経由笹ヶ峰集合の小屋合宿、3 年生の時の南アルプスの夏合宿と、大きな山行を共にしました。白川君がいるとどこかのんびりした暖かい風が吹いてくるような安心感があり、どの山行も楽しかったのですが、特に黒姫が楽しくて、いつまでもこのメンバーで旅をしていたいと思わせる山行でした。白川君はあの笑顔で後輩をいじるのがとてもうまいのです。この山行では当時 1 年の大村君をいじり、時には恐れ多くもリーダーの向井さんまでもいじり、笑いが絶えませんでした。黒姫山の頂上はカルデラのように広い窪地が広がり、その日テントを張っていたのは私たちだけでした。もちろん山小屋などありませんから、外界から閉ざされた別世界にいるような思いがしました。夜、クマザサが風に鳴る音を聞きながら、テントの中で恐ろしい黒姫伝説に花が咲き、怖がる大村君を「お前は学生時代絶対もてたよな」とまたまたいじり、怖くておかしい不思議な夜を経験させてくれました。木道の上でラインダンスよろしく足を上げるメンバーのはじけるような笑顔（向井さんのとぼけた笑顔もたまりません）がこの山行の楽しさを物語っています。

1976 年　黒姫山にて

そんな思い出があったので自分がサブリーダーを務めなければならない 3 年生の夏合宿で、リーダーが白川君だと分かったときは本当にうれしかったことを覚えています。予想通り、この山行では 1 年生の横溝君がいじられました。まじめで一生懸命の横溝君が時に弱気になるのを、あの温かい笑顔でいじりながら励ましてくれた白川君のおかげで、皆で共に北岳の頂に立つことができました。写真のコメントを見ると「関や連、頂に立つ」というコメントがついていますが、この「関や連（関東や〇〇連合？）」という名称を考えたのも白川君ではなかったかと記憶しています。同じページに横溝君が帽子のゴムをあごに引っかけ、放心状態でしゃがんでいる写真もあり、

1976 年　妙高　火打山にて

その先に白川君の大きな背中が写っています。そこで、はっと気付きました。白川君は好きでいじっていたのではない、いじりながらそっと見守り、笑いのうちに励ましていたんだなと。ラグビーで鍛えた体はたくましく、大きなザックも小さく見えるくらいでした。どっしりと揺るがない一歩一歩は後ろに続く仲間に熱い信頼を抱かせました。同時に、細やかな気配りをいつもいつもしてくれていた人だったんだなと。

そういえば、2 年生の時の大雪山縦走は、人数も多い上に女性が多い山行でした。後になって彼から聞いたところによると、かなりの重さのザックを背負っていたとのこと。しかし、そんなことは顔にも出さず、いつもにこにこと笑顔でトップを務めてくれました。そして、時には、1 年生の青山君を「みなしごハッチ」といじりました。青山君は当時やせていて足も細く、黒っぽい靴下をはいていたのが、まるでみなしごハッチの足のようだったのです。こういうことをぱっと思いつくのも白川君は得意でした。

あれはどの山行だったでしょうか。その頃、小林旭の「北帰行」がはやっていて、白川君は山行中その英訳をずっと考えていました。最後にお披露目で歌ってくれたのですが、今となっては出だしの「トゥトゥナーイ（「今晩」と言う意味だと思います)」と最後の「ワンダリーン（ワンダリングのことか)」という文句しか覚えていません。その出だしで何度も何度も練習を始めるものだから、今でも白川君の歌声が耳に残っているのです。

今頃、「トゥトゥナーイ」と歌いながら、北に帰る渡り鳥と一緒に旅でもしているかなあ。大きな赤シャツの背中を後ろ姿にして・・・　　心よりご冥福をお祈り申し上げます。